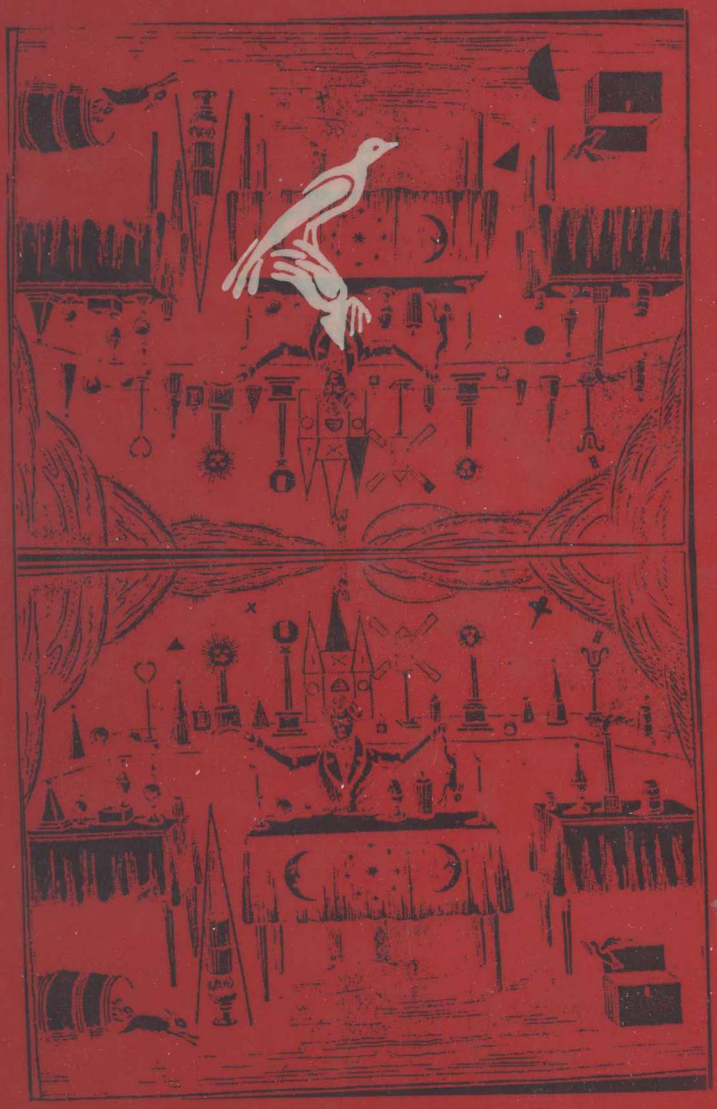
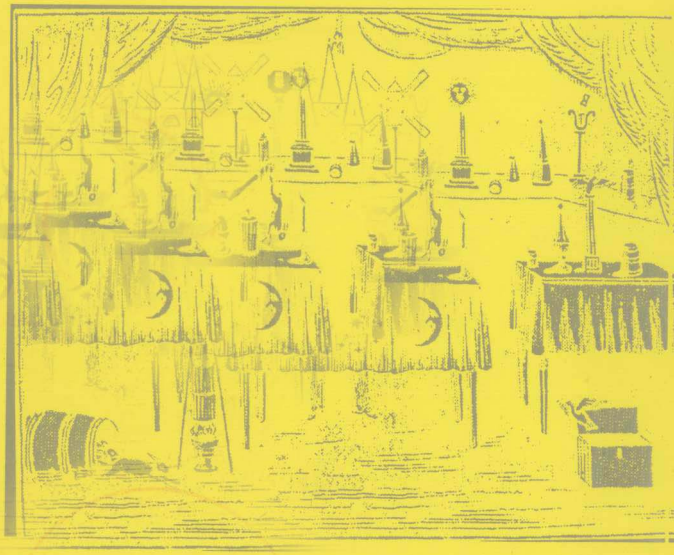
奇術師の家



魚住陽子

の家



魚住 陽子

魚住陽子（うおずみようこ）
一九五一年埼玉県に生まれる。
一九八六年より同人誌『こみゅにてい』に作品を発表。
一九八九年六月「静かな家」が第一〇一回芥川賞候補となる。
一九九〇年二月「奇術師の家」で第一回朝日新人文学賞受賞。

奇術師の家

発行日　一九九〇年三月三十日第一刷

著　者　魚住陽子
発行者　八尋舜右
発行所　朝日新聞社
〒104－11　東京都中央区築地五－三－二
電話　〇三－五四五－〇一三一（代表）
編集・図書編集室　販売・出版販売部
振替　東京〇－一七三〇

印刷所　凸版印刷
製本所　清美堂製本

定価はカバーに表示してあります

©Y.Uozumi 1990, ISBN4-02-256116-5
Printed in Japan

目次

奇術師の家　5
静かな家　83
遠い庭　119
秋の棺　149

装幀 司 修

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

作品集

奇術師の家

奇術師の家

一

「鮎ちゃん、いってらっしゃい」

麻の葉模様の袂をゆらゆら振って、母が二階の窓から身を乗り出している。自転車を押して門まで行く間、母の見送りに対して手を振って応えるのが、この家に引っ越してきてからの習慣になってしまった。

「行ってきます」

少し間を置いて見上げると、人の気配がきれいになくなってしまっている。私はうろたえて泰山木の茂りあった葉の隙間に目をこらした。母はいない。その人は必ず近いうちに本当にいなくなってしまうに違いない。泰山木の白い花は訃の香りがする。

私は諦めてペダルを踏んだ。母が以前に住んだことがあるという理由だけで、こんな古家にうかうかと引っ越してきたことを後悔するのは決まってこんな朝だ。

もとはと言えば義姉の夏子のせいだ。去年母が心臓の発作を起こした時はたいして看病もしなかったくせに、この家を見つけてからは手の平を返すように、私たち母娘を東京に呼び寄せることに熱心になった。

「本当に偶然ね。この家の持ち主が私と同じ社宅にいた三笠さんのお父さんだったなんて。それもお義母さんが新婚生活を送った思い出の家だっていうんだから、こんな結構な話ってそうあるもんじゃないわ」

単身でニューヨークに行っている夫、つまり私の兄の名代ということで自分一人でせっせと事をはこんでしまった。

「でもね、三笠さんのお父さんてだいぶ変わり者らしいの。自分が郷里に帰ってからも、この家はある人の大事な預かりものだからって、誰にも売ったり、貸したりしなかったのに、お義母さんの話をしたら、壊すまでの短い間でよかったら是非住んでくださいって言ったんですって」

私は手柄話半分の夏子の報告を真剣に聞いていなかった。その時は病気の母の希望を叶えてあげることだけが大事なことに思えたのだ。

私たちが取り壊すことに決まっているこの家に、わずかばかりの荷物を運んで暮らし始めてから、早いものでもう一ヶ月が経過している。

母の身体の調子は順調で、顔色もいいし、発作も起こさない。湯上がりの肌の艶など、もうすぐ三十歳になる娘の私よりずっと輝いて見える。

引っ越してから、終日飽きもせず家の整理に余念のない母と一緒にいるのに退屈を感じはじめた先週、夏子が私にカード会社のアルバイトの話を持ち込んだ。週五日、十時から四時までという時間帯と、事務所が自転車で通える距離というところが気に入った。母の疎開先の地方都市で生まれ育った私にとって、東京での就職は内心怯むものがあったが、財産もない母子家庭であってみればそう贅沢を言ってもいられない。

「お母さん、私が働きに出ても大丈夫」

と尋ねると母は笑ってうなずいた。

「あたりまえよ。鮎ちゃんがいつまでも主婦するんだったら私がかわりに働きに出てもいいくらいなんだから」

高校を卒業して十年間勤めた会社から貰った退職金にはまだ手をつけてなかったし、持ち家を貸している家賃もわずかながら入ってくる。しかし、いつ大きな発作に襲われるかもしれない心臓病の母と暮らしていれば、お金はあるに越したことはない。また夏子にひ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とつ借りができて腹もたつが、兄嫁より他に東京で勤め口を世話してくれるような知人がいないのだから仕方がない。

「鮎ちゃん、おはよう」

自転車に鍵をかけていると後ろから声をかけられた。

「おはようございます、広岡さん」

ベリーショートの髪に黒ずくめの格好をした広岡英子が、エレベーターのボタンを押して待っていてくれた。

「鮎ちゃんちって、すっごい金持ちなの」

「えっ、まさか。私がお嬢様に見える」

私が勤めている所は老舗の某百貨店のクレジットセンターということになっているが、どうやら親会社の下請けのひとつと言ったところらしい。オフィスとは名ばかりの古いビルの四階と五階を借りて、おもに電話と端末機だけを並べた奇妙な職場だった。

「でもさ、自転車で通ってこれる所に家があるんでしょ。すごいじゃない」

私は慌ただしくタイムカードを押しながら、また始まったと思ってうんざりした。面接の時、住所の確認をされてからずっと、幾度となく同じ類の質問をされている。以前住ん

でいた地方都市では、誰も住んでいる家が一軒家か持ち家かなどと詮索する者はなかった。
私は端末機と電話の間にある自分の机につきながら、東京って妙なところだなと改めて思った。そのうち「家は誰の名義」なんて聞く人も必ず現れるに違いない。
「アパートじゃなくて、一戸建てだなんてリッチじゃない」
英子はまだ聞き出したいことがあるらしく、端末機のスイッチを入れてから側に寄ってきて言った。
「お母さんと二人だけなんでしょ」
私はだんだん本気で腹がたってきた。うるさいわねえ、余計なお世話よと言ってしまうのは簡単だったけれど、たとえアルバイトの身分とはいえ英子は先輩だし、まだ何かと助けてもらわなければならない。
「そうよ母子家庭。家も借り家だからカードの限度額は最低の二十万、信用度Dって所かしら。私の属性に記入しといて」
冗談めかして言うとさすがの英子も黙ってしまった。
店で申し込まれたカードはオンラインのコンピューターに入力させられる前に、収入や資産についてざっと調査をされる。その基本となる顧客カードを私たちは属性と呼んでいる。申し込み用紙を一通りチェックしてリストを作成する前に、客の書き落とした所をど

うにか埋め、空白が故意かどうかもそれとなく調べて、端末に入力していくのが私たちの主な仕事だった。

客は収入源や申請した額、資産などによってＡＢＣＤに分別される。未成年や退職者、ブラックリストに載っていた人たち、それとは逆に医師や弁護士などの有資格者、著名人などの上顧客は男性ばかりの正社員からなる『顧客室係』に回される。

「やだなあ、鮎ちゃん。そんなつもりで言ったんじゃないわ。ちょっとした職業病よ」

英子は自分の分のカードの束を持ってくると、さっさと仕分けにかかった。

「よっ、出ましたブラック。おつぎはビップ一丁」

楽しそうなかけ声をあげながら、英子がカードを次々とりあげると周りの者がつられて笑った。中には彼女のひけらかす属性カードをわざわざ見にやってくる者もあった。

テレビなどで活躍するタレントが案外アパート住まいで、以前ひどい延滞トラブルを起こしているなどと英子は特別な嗅覚で嗅ぎ当てる。それに比べると田舎でのんびり育ったせいか、私はどうもこの選別が苦手だった。すんなり何の問題もないとカード作成に回した分が、『顧客室係』を通って見直すようにと戻されてくることがたびたびあった。

「カードだと思うからいけないんです。現金を貸すと思って下さい」

耳にたこができるほど言われても、客の申請はふうんと、あっさり信じてしまう癖が抜

けなかった。机の上に山積みされた申し込み用紙をぱらぱらめくって、簡単そうな属性を選んでいると、前の棚に置いてある地図を調べにきた川本麻子に声をかけられた。
「鮎ちゃん。今日のお昼は予定ある？」
「ううん。別にないけど」
「じゃあ一緒にランチしない。新しい店を開発したから」
麻子は地図で顔を隠すと、声を低めた。
私がここへアルバイトにきて、初めて端末機の操作を教えてくれたのが麻子だった。小柄で童顔、化粧も英子に比べるとあっさりしたものだったが、いつも仕立てのよい服を上手に着こなしている。短大を出たばかりの歳ぐらいに思っていたら、私より二つも歳上だと自己紹介されて驚いた。
「一時十分過ぎ、管理人室前」
私がうなずくと、取りにきたはずの地図を棚に戻してさっさと自分の机に帰っていった。
麻子に連れていってもらったビストロふうのレストランから戻ってくると二時を少し回っていた。ランチサービスにつくグラスワインのせいで赤くなった顔をうつむけて、私は午後からの電話にとりかかった。この時間では自宅にいる客はほとんどないので、承認と呼ばれる自己確認は会社にすることが多い。

三時を過ぎると夕方からのアルバイトが出社してきて、どうしても捕まらなかった顧客の引き継ぎをする。退社前の込み合う化粧室で私は英子と一緒になった。

「鮎ちゃん、昼に隠れリッチと食事したでしょ」

「何。その隠れリッチって」

「川本麻子のことよ」

内緒話を始める目付きになって腕をとられた。

「あの人ね、顧客室長の知り合いよ。油断して会社の悪口なんか言わないほうがいいよ。コネで入った奴はみんなスパイみたいなもんだから。あの人なんかどうしてこんな半端な会社にいるんだかわからないじゃない。すっごい金持ちのお嬢さんっていう話よ」

喋るだけ喋るとさっと離れていった。私は昼に麻子と二人で英子の噂をして笑ったことを思い出して複雑な気分だった。

「会社の人がね、英子さんのアパートに遊びに行った時、部屋に大きなタンスがあったんで開けたら、中が真っ暗だったんですって。ほら、彼女持ってる服がワンピースも上着もスカートもみーんな真っ黒でしょ」

その時は余り他意のない噂話だと思ったが、二人は余り仲がよくないらしい。私がぼんやりエレベーターの前に立っていると、黒い影が横切った。

「まあ、一戸建て同士で仲良くやってよ」
英子が平べったい身体を斜めにして、エレベーターの中に消えていった。

二

英子はどうしてそんなに家にこだわるのだろう。私は彼女の捨て台詞の意味がわからないまま自転車のペダルを踏んだ。会社から家までの長い上り坂には本当に辟易する。門の前までふうふう言いながらやってくると、いつの間にか英子の不機嫌が移ってしまっていた。

「ただいま」

こんなときに限って玄関に母の姿が見えない。乱暴に居間や台所のドアを開けて呼んでも、返事がない。急に不安になって、慌ただしくトイレや風呂場を覗いた。階段の前までやってきて、初めて私は二階から耳慣れない音楽が流れていることに気づいた。

二階は主に先住者の持ち物が置いてある納戸になっている。雨戸をしめたままの薄暗い八畳間に私はほとんど入ってみたこともなかった。

「お母さん、いるの？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com